

# 特集 70 年前の出来事

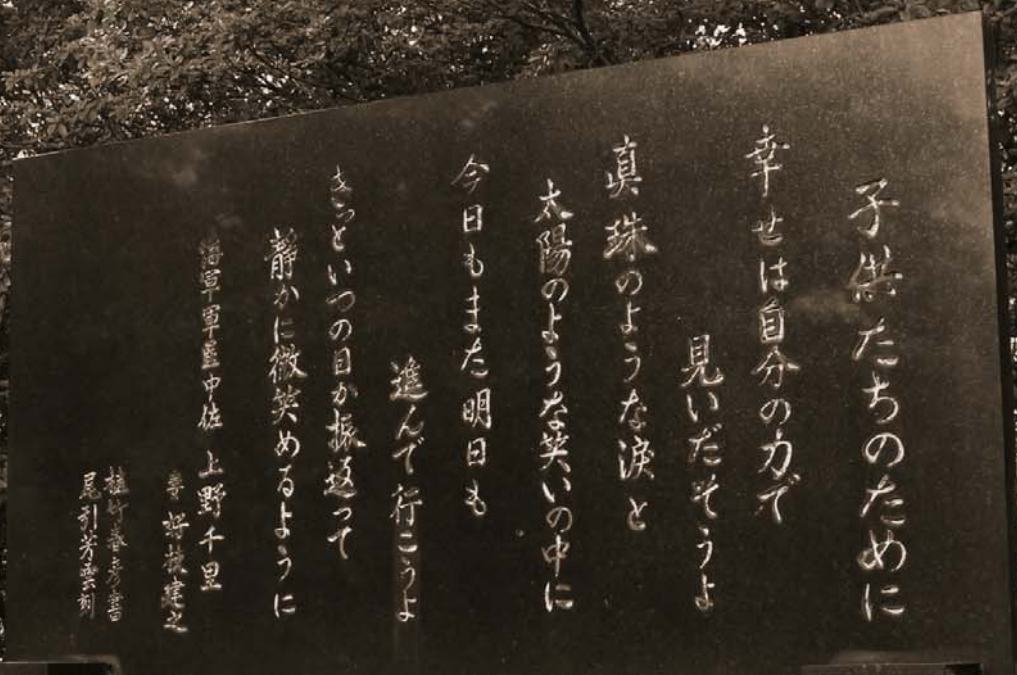
昭和 20 年（1945 年）8 月 15 日。

多くの尊い命が失われた太平洋戦争終結の日から今年で 70 年。

日本全国でも戦後生まれの方が 1 億人を上回り、当時どのようなことがあったのかを話し伝えられる方は、だんだん少なくなってきました。

今号では、当時矢板市で実際に戦時を体験された方のお話や写真などを集めました。

これからもずっと後世に伝えたい矢板の歴史の一つです。



## 上野千里先生詩碑

長峰公園内（昭和 50 年晩秋建立）

子供たちのために  
幸せは自分の力で 見いだそうよ  
真珠のような涙と 太陽のような笑いの中に  
今日もまた明日も 進んで行こうよ  
きっといつの日か 振返って  
静かに微笑めるように

※上野先生は、矢板市本町にあった上野病院の上野萬里先生の 1 人息子。大学卒業後すぐに従軍。海軍軍医中佐として戦地を飛び回った。昭和 24 年 3 月 31 日、43 歳で処刑された。





# 私の戦時体験談を語る

## 戦時中の学徒動員 村上 和生さん (88歳)



太平洋戦争中のことで、とても印象に残っているのは、旧制大田原中学校（現在大田原高等学校）の時のことです。学生の通年動員が実施され、私たちも学業を停止し、働くようになりました。私は、今の那須塩原市埼玉にあった「那須野飛行場」で通信班に配属

になりました。業務としては、それぞれの軍事施設との電信のやりとりを行ったのですが、モールス信号を覚えるのに必死だった記憶があります。その他にも電略という暗号を覚えて解読しなければならなかったもので、しばらくの間は寝ても覚めてもそのことばかり考えていた気がします。

もう一つ忘れられないのは、当時の英語の先生だったあだ名が「山ケン先生」という山田先生のことです。山ケン先生は、川崎市の軍事工場で学徒動員されていた後輩たちを引率していて、空襲が激しくなって被災した生徒をなんとか命からがら帰郷させた先生でした。当時は、英語の先生というだけで冷遇されたような時代でしたか

ら、帰郷させた責任を取られ左遷させられるとのことでした。生徒を守ってくれた先生の解任式がほどなく行われるということになり、みんなで仕事の合間に駆けつけました。あいさつの中で先生が「英国は滅びようとも世界の共通語である英語は滅びない。敵国を知り、世界の人々を知るためにも英語の勉強を続けて欲しい！」と叫び、先生は演台から無理矢理引きずり降ろされました。そして、「まだ伝えたいことがある・・・」と言いながらも退席されてしまったのです。非国民などとののしられながらも、生徒に伝えなかった、その心情はいかなものだったのでしょうか。今でも胸がいっぱいになります。

その後、私が国鉄に勤めてからも、英語でお客様に辞書を片手に体当たりで対応することができたのも、あの日の山ケン先生の言葉があったからだと思います。

色々なことがありましたが、こうして元気でいられることに感謝しながら、これからも生きていきたいと思えます。



## 山に落ちたばくだん 小堀 幸吉さん (87歳) 幸夫さん (66歳)

これは、昭和20年7月12日に安沢地区に米軍が落とっていた焼夷弾の1つです。



どうして矢板のこの地区に落としていったのか、真意はわかりません。サイパンから群馬県の太田飛行場に焼夷弾を落とそうと出撃したB29が、帰りがけに落としていったものと言われています。また、この日の夜は、宇都宮大空襲の日だったので

でその関係かもしれません。

この焼夷弾は、私の自宅付近の山に落ちました。現在、信管や火薬などを全部取って保管しています。近所の家では蔵に直撃して燃えたところもありました。この焼夷弾が落ちた終戦間際の時期になると、迎撃する日本軍の飛行機もいなかったので、私たちは逃げるしかなかったことを覚えています。同年7月10日には、片岡地区を走行中の汽車が攻撃を受けて炎上した記憶があります。また、ここからは大田原市の金丸原飛行場が攻撃されていた光が明るく見えたことを思い出します。

8月になると、この焼夷弾を出してきて戦争を思い出すようにしています。悲惨な戦争が二度と起こらないように祈っています。

## 北海道の農業体験 村上 清さん (87歳)



今年で、終戦後70年目を迎えました。私の長い人生の中で記憶が鮮明に残っているのは、戦時中の学徒動員です。

昭和19年8月12日、北海道援農の学生が、県下各地から宇都宮市の県庁に集合し壮行会がありました。午後10時、私は学友と臨時列車に乗って宇都宮駅を出発し、

北海道へ向かいました。到着したのは、8月16日でした。

援農先は、宗谷支庁枝幸郡歌登村上幌別という集落で、私は、月という友人と2人で、実行組合長の大津年明様にお世話になることになりました。

翌日から農作業が始まり、最初はカラムシの刈り取りでした。茎は1m50cmくらい伸び、織物の原料になる作物です。その刈り取りが終わると、えん麦（イネ科）の刈り取りになりました。畝の長さは、300mほどあり、3本畝を刈っていきます。トゲのある雑草があり、刈り取りに苦労しました。9月に入ると、ジャガイモ掘りが始まりました。芋掘り作業は、自家労力では容易でないので、浜の方から漁師の奥さんや若い女性たちが来ていました。15ヘクタールの芋掘りは、約1カ月ほど行われ、掘り終わった芋は、馬そりで工場へ運ばれ、デンプンに加工されました。工場の機械が動き始めると、私たちは夕食後、生デンプンをトロッコに乗せ工場から近くの乾燥室へ運

びました。疲れた身体でのこの作業は、午後10時頃まで続き、容易ではありませんでした。毎日の作業が終わると、近くの川へ行って汗ばんだ身体を洗いました。井戸水が少なく、毎夜風呂が沸かなかったからです。

慣れない作業の時は、大津様はじめ家族の方が、仕事の手順や能率をあげる方法について親切に教えてくれました。家族ぐるみでいつも温かく私たちに接してくれました。

援農日記を書いていたのは、出発した8月12日から11月11日までです。毎夜ランプの下で書き続けた日記は、作業の内容だけでなく、大津様と家族の方との温かな心の交流の記録になっていました。お別れには、おみやげとして、当時貴重なデンプンをいただきました。お別れする時、「長い間お世話になり、ありがとうございました」と真心を込めてあいさつしました。雪が降っていましたが、家族全員で見送ってくれた感激はいまだに忘れることはできません。

3カ月間、うれしかったことは、ふるさとの父からの近況の便りでした。心温まる便りには、読む度に胸がいっぱいになりました。

大津様、家族の方との強い心の結びつき、担当の伊藤先生と同窓会の激励、やさしい父の便りなどが、私の生活の大きな支えになりました。大津様とは文通を重ね、30数年間続きました。この援農体験によって、人との出会いをいつまでも大切に、全ての物事に最後までやり抜く根性が培われたと思います。

### 矢板市戦没者追悼式

8月15日(土)は、70回目の終戦記念日です。戦没者を追悼し、平和を祈念する日として、政府主催により日本武道館で全国戦没者追悼式が執り行われます。

市においてもこれに準じ、戦没者896柱の御霊に対し、戦没者追悼式を執り行いますので、ご参列賜りますようご案内を申し上げます。

日時/8月15日(土) 11:45～  
場所/長峰霊苑

\*当日は半旗を掲揚し、正午のサイレンを合図に1分間の黙とうをささげましょう。



原爆死没者に黙とうを

8月6日8:15は広島市に、8月9日11:02は長崎市に原爆が投下された時刻です。当日は原爆死没者のご冥福と世界の恒久平和を祈って黙とうをささげましょう。

問い合わせ/社会福祉課 ☎(43)1116



# 残し伝える 記録と記憶

## 父の想いを後世に 今井 勝巳さん

自宅を整理している時に、義父の孝市さんの遺品の中から、出征の際に贈られたとみられる日章旗を2つ見つけました。1つには、兄弟や親戚などの身近な人からの寄せ書きが書かれたもの、もう1つには、当時の県知事や町長などからの寄せ書きが書かれていました。

見つけた際に、いっそのこと処分してしまうかとも考えましたが、しっかりと表装して保管してあったことから、義父の想いを少し感じ取れたような気がして、思い留まりました。父とは、戦争中の話をほとんどしたことが無かったので、今となってはどのような体験してきたのかを知ることはできませんが、想像を絶するようなこともあったことでしょう。話したくないことや秘密にしておきたいことなども多くあったと思いますが、後世になにかしら伝えたい想いもあったのではないのでしょうか。

私たち託されたもの使命として、平和の尊さや、当時の歴史を知るための資料として、郷土資料館などへ飾ってもらうなどし、伝えていきたいと考えています。



## 矢板に飛行場？ 【参考文献：矢板市のあゆみ 御前原飛行場の記事より】

戦争も末期になるにつれて、日本本土も空襲を受けるようになりました。現在の大田原市にあった「金丸原」は陸軍の演習場で、一部に陸軍の飛行場が設置されていました。その飛行場も空爆を受けるようになってきたので、飛行機を分散させ、敵機から発見されないように隠し、飛行できる場所が必要になりました。候補になったのが、黒磯の埼玉飛行場と御前原の原野（現在の矢板東高等学校の南からシャープ矢板工場の北側付近までの地域）でした。

昭和19年秋から原野の伐採、整地などが開始されましたが、健康で若い男子はほとんど出征してしまい、飛行場造成に動員する人手も不足する有様であったので、小学生の高学年から矢板農学校の男女生徒まで交代で労働の動員をさせられました。小学生が箒川から袋に入れた砂を背負って滑走路にまいたり、女学生が土止めのくれを切ったりした飛行場造りも、完成しないまま終戦を迎えました。

現在は住宅地になり、その面影は残っていません。当時の資料もないため、詳しいことは不明ですが、米軍にはその存在がわかっていたようで、埼玉飛行場にB29、30機で爆撃した帰り道、ここにも爆弾を投下して行きました。今でもこの辺りのことを「滑走路」と呼ぶ方もいます。



まずはお電話で  
お問い合わせ  
ください

## あなたの声や資料をお寄せください

### 【戦争を経験された方】

戦争当時、あなたはどこで何をされていたのでしょうか。矢板市ではどのような様子だったのでしょうか。誰にも話したことの無い体験や胸の奥にしまっていることはないでしょうか。

現在、市では戦時中の様子を後世に残すための体験集（仮称）の作成を計画しています。次世代を担う子どもたちに、戦争の悲惨さや平和の尊さを伝えていくための資料として活用していきたいと考えています。

様式などは特にありませんので、もしよろしければ、お手紙やメール、録音テープなどをご送付いただくか、直接お越しください。

また、郷土資料館では、戦争に関する資料の提供を受け付けております。当時の写真や物など、歴史を後世に伝えることができる貴重な資料ですので、ぜひお寄せください。これらのものについては、10月に郷土資料館で開催する企画展「矢板市の民話展」の際に、戦後70年の特設コーナーを設け展示を行う予定です。送付・問い合わせ／

〒329-2501 矢板市上伊佐野 761-2  
矢板市立郷土資料館 ☎・FAX (43) 0423  
✉ yaita-siryoukan@biscuit.ocn.ne.jp  
\*月曜・祝日休館



戦争中の矢板市内は  
こんな暮らし  
だったんだよ

こんな方々が  
東京から疎開して  
いたんだよ

左の写真は、皆さんから  
ご提供いただいた  
資料の一例です。  
ご寄贈のご検討を  
よろしくお願ひします。